
伊予の秋桜

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

伊予の秋桜

【Nコード】

N9644C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

伊予の武士梶本吉太郎。生涯桜を愛し続けた彼が氏の間際で願うものとは。幻想的な作品にするよう意識しました。

第一章

伊予の秋桜

伊予の国の話だ。ここの武士に梶本吉太郎という男がいた。幼い頃より桜の好きな男だった。彼はいつも桜の側にいた。

「もう散ったぞ」

父が晩春にも桜の下にいる彼に言ったことがある。もう桜は緑になっっていた。

「それでもよいのか」

「はい、それでも構いません」

彼はにこりと笑って答えるのだった。

「緑の桜もまたいいものです」

「よいのか」

「私は好きです」

やはりにこりと笑って答える。

「この緑も何もかも。それが桜ですから」

「ふむ。真に好きなのだのう」

父は我が子の言葉を聞いて感心した。見れば桜の下に書や木刀を持って来ている。学問や修業も桜の下で行っているのだ。

「やることはやっておるようだしな」

「桜に顔見せできませんから」

彼はそう答えた。

「ですから。そちらは当然のことに精進します」

「うむ、それはいいことだ」

それを聞いて安心した。やることをやっていれば何も言いつもりはなかった。彼はそうした寛大な父であったのだ。何かと口煩いのが多い武士の父とは少し違っていた。

「では今日はずっとそこにおるのだな」

「そのつもりです」

吉太郎は桜を見上げて父に返した。緑が豊かに繁っている。

「夕食には戻りますので」

「戻って来るのだぞ」

「はい」

その日も次の日もずっと桜の下にいた。それは元服してからも変わらず妻を迎えてもであった。時間があれば桜の下にいるのだった。

「雪なのに」

妻が迎えに来て苦笑いを浮かべて彼に声をかけた。

「出られずともよいでしょうに」

この日は深い雪だった。辺り一面が白く化粧されている。吉太郎はその中で一人桜の木の下にいたのである。桜もまた白く化粧されていた。

「いや、こうした日もいいものだ」

吉太郎は穏やかに笑って妻に返す。杯を手に雪の桜を見ている。

「雪の桜もな」

「まだ咲くには早くても」

「構わんさ」

彼は酒を一口飲んだ後で妻に述べた。

「わしはとにかく桜が好きなのだからな」

「左様ですか」

「うむ、その方と同じ位にな」

妻に顔を向けて言った。穏やかな笑顔をそのままに。

「だから。一緒に見ぬか」

「桜をですか」

「雪の桜は嫌いか？」

そう妻に問う。

「ならよいが」

「いえ。御一緒させて頂きます」

妻もにこりと笑って彼に言葉を返した。

「私も。何か見たくくなりましたから」

「そうか。では見ようぞ」
「はい」

明けても暮れても桜だった。彼にとつて桜はなくてはならないものでありそれは老年になってからもそうだった。妻もいなくなり子供達が家を継ぎそれぞれ家を出てもそれは変わらなかつた。

隠居になつた彼はこの日も桜の下にいた。季節は冬も終わり頃になつていた。

「お爺様」

そこに孫達がやつて来た。

「今日も桜を御覧になられているのですか？」

「その通りじゃ」

彼は優しい顔で孫達に述べた。

「もうすぐじゃいな」

「咲くのがですか」

「うむ。もうすぐじゃな」

優しい目で桜を見上げて言う。もう蕾が出来ていた。もうすぐである。

「咲くぞ。満開の桜が」

「それを待つておられるのですか？」

「ここに」

「いや、実はそうではない」

そう孫達に述べる。

「わしはずつとここにおるのじゃ。それだけじゃ」

「それはどうして」

「好きだからじゃ」

それが彼の答えだった。

「桜がですか」

「うむ」

また孫達に答える。

「それこそ御主達の歳からのう。好きじゃつたのじゃ」

「私共の歳からですか」

「もう遙か昔じゃ」

そう述べる。

「わからんかな。そこまでは」

「ちよつと」

「何か掴めません」

「ははは、歳を取ればわかる」

孫達に言う。笑いながら。

「何れな。それでじゃ」

「はい」

「どうじゃ？一緒に」

彼等を手招きしての言葉だった。

「見るか？今の桜を」

「宜しいのですか？」

「よいよい。桜は皆で見るものじゃ」

また笑いながら言う。

「じゃからな。見ようぞ」

「わかりました」

「それでは」

「桜は。ずっとここにおる」

自分の側に寄って来た孫達と桜に対しての言葉だった。彼は桜に声をかけることも多かった。彼にとってはそうした存在になっていたのだ。

「ずっとな。わしがいなくなっても」

「お爺様がおられなくなっても」

「ずっと。見ておいてくれよ」

今度も孫達と桜への言葉だった。

「わしの分までな」

「はい」

「わかりました、お爺様」

孫達が彼に答える。彼等の声は直接聞いた。それと同時にもう一つの声も聞いたのだった。だがそれは孫達には聞こえはしなかった。

第二章

その年の秋だった。吉太郎は遂に床に伏した。もう長くはないことは誰の目にも明らかだった。彼はその死の床でまた言うのだった。

「桜の下に行きたいのう」

「桜の下にですか」

「駄目か？」

看病をする家族に問うた。

「最後に」

「いえ」

「それでは」

皆それを拒みはしなかった。笑顔で応える。

「桜の下にお連れします」

跡継ぎでもある長男が述べてきた。

「それで。宜しいですね」

「うむ」

吉太郎も笑顔で応える。

「済まぬな。我儘を言つて」

「いえ、これ位は」

「そうでございます」

他の家族も長男に続くようにして吉太郎に声をかけてきた。

「お爺様は今までずっと桜を愛してこられましたから」

「だからこそ」

「だからこそか」

家族の者達の心が伝わる。それで彼も心からの笑顔になったのであった。

「重ね重ね済まぬ」

「さあ皆」

長男が家族の音頭を取る。

「お爺様をあの桜の下に」

「はい」

皆で吉太郎を担ぐ。かつては天を衝かんばかりの大男だった彼が今では痩せこけて今にも折れそうな状態であった。その彼が桜の下に皆に担がれて運ばれるのだった。

吉太郎は桜の下に運ばれると横たえられたまま桜を見上げていた。秋の桜は当然ながら花を咲かせはしない。ただそこに緑の葉を見せられているだけだった。

「折角の桜ですが」

「いや、構わぬ」

そう家族に返す。

「わしにとつて桜が咲いている咲いていないは問題ではないのだ」

「左様ですか」

「そうじゃ。そこに桜があれば満足なのじゃ」

目を細めさせて桜を見上げながら述べる。

「それだけでな」

「それでも咲いているのが一番ですよね」

周りにいる孫娘の一人が彼に言ってきた。幼い娘だった。

「やっぱり」

「それは確かにな」

それについては彼も認めた。

「じゃが。今は秋じゃ」

「それはまあ仕方ありませんわ」

長男の嫁が彼に答えた。

「やはりそれは」

「それならばいいのじゃ」

それもよしとした。

「言っても仕方がない」

「ではこのままで宜しいのですね」

孫息子の一人が述べてきた。

「秋の桜のままです」

「適わぬことを言つつもりはない」

その言葉は潔くさえあつた。

「別にな。ではな」

「はい……いや」

「あつ」

ここで皆異変に気付いた。

「お爺様、何か」

「これは」

「これは……何と」

吉太郎も家族の者達も突如として起こつたことに我が目を疑つた。目を丸くさせて上を見るのだった。

それまで緑だった葉が消えてそこには桜の花びら達があつた。まるで春のそれのように満開の桜達がそこに咲き誇つていたのである。それは春の景色そのものであつた。

「桜が咲いている」

「そんな馬鹿な。夢では」

「いや、夢ではない」

吉太郎は驚く家族の者達に笑顔で述べた。

「これはまことのことじゃ」

「まことの」

「では本当に桜が」

「うむ。咲いておる」

目を細めさせての言葉だった。

「まさかな。こんなことが」

「桜からの最後の贈り物なのかも」

あの幼い孫娘がまた言つてきた。

「最後の？」

「だって。お爺様の最後だから」

他の家族にも吉太郎にもそう述べた。

「だから桜が」

「そうなのか」

「それで」

皆娘のその言葉に頷いた。

「咲き誇っているのか」

「だとしたら。何と有り難いことじゃ」

吉太郎はそのことにあらためて心を奮わせた。そうしてその目に涙をたたえながら言うのだった。

「最後に満開の桜を見られるとは。桜よかたじけない」

桜は彼の言葉には何も答えない。相変わらず咲き誇っているだけであつた。

「これで。心地よく旅立てるわい」

「ではお爺様」

「うむ」

消え入りそうな声で周りの者達に言う。

「ではな。行つて来るぞ」

「ええ、これで」

「皆も桜も。かたじけない」

そう言い残してゆつくりと目を閉じた。桜花びらはそのまま咲き誇っていた。それから吉太郎の命日には毎年秋だというのに咲き誇った。人々はこれを伊予の秋桜と呼んだ。

伊予の秋桜

完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9644c/>

伊予の秋桜

2009年5月16日21時47分発行